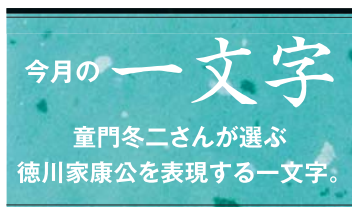




「竹千代手習いの間」
臨濟寺の部屋を駿府城異櫓内に復元展示。



家康の人生観は「信義」を守り、そのための「信頼」をなによりも大事にしたことだと思います。



著書のご紹介



「大御所家康の策謀」

日経ビジネス人文庫 730円(税込)

將軍職を秀忠に譲った家康は、駿府城を構え、大御所政治を展開。土木技術者、豪商、僧侶、学者、外国人をプレーンとして駿府に集め、豊臣色を一掃し、その後260年続く泰平の時代の基礎づくりに取り組む姿を描きます。



天井に描かれた龍。



「臨濟寺」今川家の菩提寺で、家康公が人質時代に

この組みあわせ人事は、その後幕府で制度化され幕末までつづく。このシステムは勤務を二か月交代(月番)とすることで保たれた。こうすると、

- ・対象者が比較できる
- ・これによつてそのポストにある者は反省し、「よし、つぎの当番のときはほかの者よりりっぱな実績をあげてやる」と奮起する

したがって、家康にすれば任命した部下の競争心、向上心も煽つて、モラルアップ(やる気おこし)をはかることになる。月番は当然責任をあきらかにする。家康流の巧妙な分断支配だ。これはかれが部下に対して、

- ・仕事は大幅に委任する
- ・しかし任かされたしごとについては、わし(家康)とおなじ責任をもて

という「分権と責任のケジメ」を設定していたことを物語る。

あるとき天下人になった豊臣秀吉が、金にあかせてあつめた財宝を自慢し、広間にいる大名たちのひとりひとりに、「おぬしの宝物はなんだ?」ときいた。大名たちはそれぞれ家宝にしている品物を披露した。家康の番になった。家康は、「家風がつつましいので財宝はありません。が、私の宝は私のためにいつでも生命を捨てる部下たちでございます」と答えた。大名たちはあきれ、秀吉は大笑してその場の空気をなごやかにした。これをきいて家康の部下は感動したが、家康の部下へのきもちは温情だけではない。ここに書いたようなクールな非情さも、その底に据えられていたのだ。